

佐藤とハルミ(ブルーバード座のレビューの踊り子)の会話。

佐藤 「並木君だね……遊佐^{ゆさ}って男知ってるね」

ハルミ 「ええ」

佐藤 「幼馴染だそうだが……」

ハルミ 「幼馴染って……」

佐藤 「子供の時、友達だったのかね」

ハルミ 「友達って、半年ばかり隣同志で話した事があるだけよ」

佐藤 「正直に言って貰わないと困るんだがね」

ハルミ 「どういう関係って？」

佐藤 「例えばさ……恋人だったとか」

ハルミ 「そんなんじゃないやしません」

佐藤 「じゃ、ただのファンかね？」

ハルミ 「そんなんでもないんです」

佐藤 「じゃなんだい？」

ハルミ 「……」

佐藤 「毎日のように来てたそうじゃないか」

ハルミ 「だって、追いつ返す訳にも行かないわ。知ってる事

は知ってるんだもの」

佐藤 「そんなこと訊^きいてやせんよ」

ハルミ 「……」

佐藤 「最後に逢ったのは何日だね」

ハルミ 「……」

佐藤 「君」

ハルミ 「考えてるんです」

佐藤 「考えてるって、君」

ハルミ 「……」

佐藤 「……どうしたんだ、君？」

ハルミ、俯^{うつむ}いてしまう。

佐藤 「君——」

ハルミ 「……私……なにも悪いことしないのに……」

と、とうとう泣き出してしまう。

佐藤、村上と顔を見合わせる。
全く処置なし。

103 或る公衆電話の前

村上、ぼんやり人の流れを見ている。

佐藤、公衆電話から出て来る。

佐藤「署へは報告しといたよ……あああ、疲れたな……あとは明日だ」

村上「……じゃ、僕はここで……」

佐藤「いや、もう一軒つき合って貰うかな」

104 郊外の田園の道

稲の上に渡ってくる風と蛙の声……夕焼け。

佐藤と村上、並んで歩きながら、

村上「(ポツンと)あの女、なんだって泣いたりしたんでしょうね」

佐藤「疲れてたのさ、あの子も俺たちも……まずい事しちゃったよ。疲れると、こらえ性がなくなつてナ」

村上「……」

佐藤「ものを訊くのはむずかしいよ……上手に組んだらこつちの負けさ……角力すもうと同じだ」

村上「明日、もう一度あの女に当って見たい気がしますが……」

佐藤「ウム……それもいいが、あの女から何か引き出すのはむずかしいね……ああ言う感じやすい女の子ぐらい頑固なのはないのさ……気持こじらせたらまるで石だ」

村上「……ところで、何処へ行くんですか？」

佐藤、ニヤニヤしている。